

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

好々爺、社会を語る

— 気になる2つの現象 —

海老澤 栄一

最近、気になる社会現象が2つある。まず最初。それは国の機関や民間研究団体、全国新聞調査、などで話題になる社会現象中、判で押したように共通するトップは、“コミュニケーション欠落”である。子供同士、家庭内、大人同士、学校内、職場、地域内、社会、など複数の人たちが集まる場所での意思や意志の疎通がなくなりつつあるという現象のことを指す。ツイッター、SNS、ソーシャルコミュニケーション、のようなカタカナ日本語やローマ字が氾濫している。中身が分からないまま、片寄った媒体に依存していることも原因の1つになっていると思われる。

コミュニケーション(communication)には、本来、“懇談する、話題を共有する”などの意味があり、それは共同や協働行動には欠かせない社会的つながりの基本になっている。現在、ツイッターが大流行である。影響範囲は大きく、社会的に著名な方が“つまらぬおしゃべり”をただけで、翌日は全国区で流れてしまう。twitterの意味は本来、“なじる、あざける、やじる、しかる”などで、けっして良い意味で使われていないことが分かる。同義のtease(ねちねちいじめる、いびる)、taunt(ののしる、なじる)、good-humored(気さくに、上機嫌で)などをみてもあきらかであろう。対面見直しが必要なのではないだろうか。

もう1つ、うつむきでかつ下向きな人生も

気になる。キャンパス内のできごと。研究室を出て違った建物へ移動するとき、前から来る学生が下向きで何かを見ながら指を“チョコ、チョコ”動かして歩いてくる。直前にいる学生も“チョコ、チョコ”やっている。こちらは急いでいるので追い越そうとすると、ぶつかりそうになる。要するに両サイド、“チョコ、チョコ”歩きをしており、二進も三進もいかない状態になる。歩行スピードが極端に落ちる。

この現象はキャンパス内のみならず、駅のプラットホームや電車内でもよくみかける。大げさに言えば日本中、そこかしこで下向きの“チョコ、チョコ”通信をしていることに気づく。“ぶつかった、ぶつけられた”と、ときに殴り合いの喧嘩になる。横向きや斜め向き、さらには小生のように後ろ向き人生もいただけない。しかし若者は少なくとも数人のヒトが通行する廊下や公道では横広がり歩きやチョコチョコ歩きは、慎んでもらいたい。

ここでとりあげた社会問題は、些細なことであるかもしれない。しかし全国区でみても同じ現象が起こっている可能性がある。それを考えると、どこかが発信基地になり健全な地域社会構築のきっかけを作ることが急務であろう。周囲への気づきなし現象や言われないうちやらの現象、言われてもやらない現象は、社会力ばかりでなく、企業力を削ぎ、国力を削ぐことになる。わが国の国際競争力が次第に弱まり、現在16番目あたりをウロウロしている、という調査データもある。蒞蓄(うんちく)爺さんの辛口コメント、でした。

(所長/えびざわ・えいいち)

大学附置研究所の機能

— 「国際経営研究所」の場合 —

はじめに

どこの組織でもまったくの自由は存在しない。何らかの制約のもとで、行動しているのが通常である。わが国経研も例外ではない。学校法人のもとでの秩序だった健全な行動が求められる。所長を退任するに当たって、思いついたことを書き留めてみることにしたい。

現実の研究所環境

大学の機能はそれ自体の存続、つまり持続可能性が最終目標である、という考え方がある。毎年、入学式があり、オリエンテーションがあり、半年に15回の講義があり、コンパがあり、宿題があり、ゼミでの発表があり、期末試験、夏休み、インターンシップ先確保、海外大学派遣学生の付き添い、学園祭、その期間中の模擬店舗経営、インターゼミナール大会やディベート、文化祭への展示物準備、懸賞論文審査、その間に入学試験問題作成、各種入学試験、追い出しコンパ、卒業式、などの行事が目白押しである。この間に論文を書き学会発表をし、出版物も出すということになる。

毎年繰り返される多様な行事を何とか処理し、コマネズミのように無我夢中で仕事をこなし、気がついたら1年が終わっていた、ということが典型的な流れである。少なくとも私の場合、このような流れで今日まで何とかやってきた。その上に研究所の仕事がある。開き直ってというならば、周囲の助けなしでは、何も動かないし何も動けない。幸いなことにしんみ（親身とも新見とも新味とも書く）になって作業してくれた委員や事務局スタッフに恵まれた。本当に恵まれた。

しかし冷静に振り返ってみると、“自分で自分を褒めてあげたい” レベルであつたに過ぎないことに愕然とする。ただ単に動いていたに過ぎないのである。今後のことなら、少しは元気をだして語れそうである。

若干の提言

1. 外からの情報支援(outside in)：市民代表や学識経験者、企業経営者などからなる諮問委員会を設置し、さまざまな意見や助言をいただく。小中高校生を参加させても面白いかもしれない。その下準備はすでにできている。
2. 他機関との戦略連携 (strategic alliances)：国内の民間シンクタンクを初め、国内外の他大学の研究所との情報交換や共同研究機会の常設、時代最先端をいく戦略事業の共同構築などである。下地はできあがっている。
3. 企業や個人による賛助会員 (supporting member) 化の推進：地元密着型の研究所を指向するために、クリアしなければならないハードルの1つがサービスの一部外部化とそれに伴うコストセンターの一部プロフィットセンター化である。研究所に密着した外部機関や関心のある個人からの資金調達の道を開くことである。現状では予算組み立てがやや形骸化している傾向がみられるので、社会の動きに合わせて SNS 化することが急務であろう。
4. 資源共有化(resource sharing)の促進：研究所所属資源として、わが国のディズニー設立前後の貴重資料がある。ある意味で現在、死蔵されている状態である。これを法人の資源として活用する方法の検討が待たれる。積み残した作業の1つになっている。この他貴重本の蓄積も国際経営関連ハンドブックやエンサイクロペディアを中心に 50～60冊は優にある。この有効活用方法も未着手である。

これら4つの事業は、取り組むにはやや重たい内容が多く含まれているようにも思われる。重要度と緊急度を決めて対応していただければ、段階を1つ超えたレベルでの研究所経営が確実に実現するであろう。“蜜蜂軍団”のようにブンブン音を立てながら、動きまわってみてはどうだろうか。新風が吹くかも知れない。

恩師との出会いと私の現在の研究

君島 美葵子

経営学部の教員生活がそろそろ1年を経過しようとしています。先生方からはご指導ご鞭撻を賜り、職員の方々にはさまざまな業務でお世話になり大変感謝しております。

私は、一橋大学名誉教授の岡本清先生のひ孫弟子にあたります。私の就職を岡本先生に報告した際、そのお返事としていただいたお名刺には、私の名前と「祝 神奈川大学経営学部御就任」と書かれていました。岡本先生のご著書『原価計算(六訂版)』で学んできた私にとって、それは宝物であり、それを励みにしながら教育・研究に取り組んでいます。

恩師である横浜国立大学の高橋賢先生からは、現在もさまざまな助言をいただきます。私が大学教員を目指すきっかけを作ってくださったのが高橋先生でしたので、本職を通じて少しずつ恩返しをしていきたいと考えています。高橋先生は、私が大学院在学時に全学のベストティーチャー賞を受賞されています。そのため、「原価計算や管理会計の講義で、どのようにすれば学生の関心を惹きつけられるのか」と、学部のご講義を聴講し、教授法も学びながらその答えを探していたものでした。私の研究領域は、原価計算・管理会計ですが、会計学全般の教育にも対応できるよう、自身の研究の合間を縫っては可能な限り会計学領域の学部の講義に出席していました。このように学生が自発的に取り組みたいことを最大限に尊重し、それを見守ってくださる恩師がいたからこそ、今の私があるのだと思います。

さて、私の現在の研究テーマは2つあります。それは、「営業費会計」と「セグメント別損益計算書の計算構造」の研究です。営業費会計は、学部時代の卒業研究を出発点として、現在も継続的に取り組んでいる課題です。従来の営業費会計では、営業費(原価)をどのように計画し、統制するかを主な論点としています。それに対して、現在の営業費会計では、収益作用因(レベニュー・ドライバー)を原価計算構造へどの

ように組み込むべきか、営業活動を評価するための業績評価指標はどのようなものが望ましいのか、というように原価だけではなく収益や利益、さらには業績評価指標までも含めた広範なコスト・マネジメントを対象としています。そのため、私の営業費会計に対する取り組みは、先行研究の営業費会計理論と現在の営業費会計実務とのギャップを明確にしたうえで、営業費会計の新たな理論の構築とその理論の事例検証を進めているところだといえます。

セグメント別損益計算書の計算構造の研究は、恩師である高橋先生の影響を強く受けています。高橋先生は、直接原価計算論を専門とされ、特に直接原価計算方式の損益計算書の計算構造を研究されています。高橋先生のご著書『直接原価計算論発達史』を読

むと、その時代の社会的・経済的背景、あるいは企業の経営戦略や会社組織などと直接原価計算論の発展との関係性を掴むことができ

ます。私は本書で、原価計算の計算構造がその時代の社会的・経済的背景を反映するということを実感し、ぜひともこの領域を追究していきたいと考えるようになりました。セグメント別損益計算書の発展については、そのような直接原価計算論の発展を見ていくと紐解くことができるのです。そのため、「直接原価計算論の先行研究を適用することによって、新たな顧客セグメント別損益計算書の計算構造を構築できるかどうか」、あるいは「先行研究とはまったく異なる計算構造を構築する必要があるのか」といった視点から、検討を重ねているところです。

【参考文献】

岡本清『原価計算(六訂版)』国元書房、2000年。
高橋賢『直接原価計算論発達史』中央経済社、2008年

(所員/きみじま・みきこ)

研究余滴

国際経営研究所の発信機能を自己診断する

はじめに

診断には過去から現状を踏まえその延長線上で未来を語る診断、および願望を含め未来から現状を眺める診断の、大きく分けて2つの診断がある。これまで診断学ではどちらかという、前者の診断が主な内容であった。この点を考慮に入れながらわが研究所の診断を試みる。

全体診断

設立後20年たち青年期がすぎ、熟年期に入りかけたところである。ここ数年、やや外向きの行動がみられるものの、基本的に何をしているかが分かりにくい“内向き”の動きに終始している部分が目立つ。

その大きな理由の1つは、会員向けのサービスが設立趣旨の大きな役割になっていたことと関係があるように見受けられる。1つの内向文化として定着しつつあることが懸念される。若手や中堅常任委員もいるので、新しい息吹を期待したいところである。

個別診断

制度疲労症候群

制度では必要に迫られ、まず形を作って、それに魂を後から注入する形が一般的である。学部設立とその動きに先導する形で、学部教授会のない仕組みを法人主導型で作ったのが研究所組織であった、とお聞きしている。構造中心であるともいえる制度づくりである。この影響が跡を引いているのかもしれない。

この研究所の所員がそこに組織があるから参加して、共同研究の機会があるから申請し所定の研究費を配賦してもらおう、という形が定着したのであろう。当初から“魂”が明確にあったとはいえない上に、そこに何がしかのモノ、カネがあり、ヒトがいるから仲間を誘い共同で研究する機会を得る、という構図である。“結果良ければ、それでよし”という流れである。見直しを、と思っているうちに通常の流れに押されて下流に下ってしまう。長良川の川を下った船は、車の後ろに括りつけられて上流に戻る。その繰り返しである。

コミュニケーション欠落症候群

常任委員が5名いて、それぞれの役割が決まっ

ている。必要最小限の仕事をこなしていれば、無事1年の任期が終わる。所長も所長でために“つながり”をもとうともしない。いつのまにか個別業務遂行業になってしまう。シナジーが生まれにくくなっている。

ブドウの房が幾つあっても、それらをつなぐチャネルがなければ相乗効果は生まれてこない。ここでも“魂”が生きていないのが気になる。

予算消化型文化浸透症候群

研究所の機能が基本的にコストセンターから発している。つまり予算が与えられる構図になっている。その枠を“上手に使う”手段が管理者に求められる。これではいつまでたっても、斬新で外向きな(inside-out)戦略展開は難しくなる。

外部資金を含めた予算増分型文化の生成が急務であろう。次期以降の国経研に期待したい。

おわりに

ここ数年間、多少は地域を意識した対外活動を展開してきた。市民向けアンケートとその結果報告、同じく市民向け講演会およびシンポジウムの開催、小中高校生対象「わたしたちの街の経営」提案作文募集、などを実施してきた。これらの成果を踏まえてさらなる発展形態の実施が求められるよう。

たとえば、現在のところブックレット作成で終了している共同研究成果の公開発表会、研究員の専門領域にかんする地域公開、市民との共同提言交流会、地元銀行や商工会議所などとの学生を巻き込んだ起業企画の場づくり、などである。自分みずからの枠を取り払い、社会的に何となくあるガラスの天井や壁を取り除く努力は、今後益々重要になってこよう。(EE)

編集後記 ~~~~~

3月をもって海老澤栄一先生がご退職なさいます。そこで本号では先生に国際経営研究所のこれまでを振り返って「提言」や「自己診断」を執筆していただきました。ご高覧いただければ幸いです。(H)

~~~~~